

雑感



津 守 真

○ 保育はことばによって組み立てられたものではない。保育は、身体を動かし、心

にならないのは、内容がないからだなどと思つたらとんだ考え違いだ。

い。ことばを合理的に組み立てるほど、それに従わねばならないような気を起こさせ、そのために、実際の場では、おとなか

らも子どもからも、いきいきしい精神を奪つてしまうのだ。保育の実際は合理的に動くものではない。保育の実際は、むしろ不合理的なものである。感情ではたらき、偶然

○ ことばを組み立てることを先にして、それに従つて保育をしていくのがよいという考え方があつた。ねらいとか、目標とか、指導上の留意点とか、予想される活動とか、そういうものをことまかに書かなければ計画性がなく、思う考え方がそれだ。

い。動かないはずのものが動いたり、見えないはずのものが見えたりする。おとなの筋道はあてはまらない世界である。おとな

ことばであらわすことができないのが事実である。熟達した保育者が保育の真髄を語るとき、それはごくあたりまえの平凡なことばにしかかならない。保育の内容は、ことばにならない部分が大部分なのだ。ことば

られても、保育の実際はそれとは関係がないことばの上で筋が立ち、合理的に組み立てられても、保育の実際はそれとは関係がない

筋道はあてはまらない世界である。おとな

の筋道だけのことばを並べても、保育の実際とは何の關係もないのだ。關係があるかのように思つて、そのことに多くのエネルギーと神経を使つたら、保育の實際を損つてしまう。

○ 保育の實際の場で重要なことは、保育者が子どもをじかに感じることで、保育者をもつことだ。目の前に子どもを見ていながら、子どもの声を聞いていながら、子どもを感じることで、他者を感じることができないときがある。他のことに心を奪われているとき、過度に緊張してこちこちになつてるとき、保育者自身の心が乱れて統一のとれていないときなどである。ことばにとらわれ、ことばの枠にはめられて子どもをみると、子どもをじかに感じるができない。望ましい方向にのつてくれない子どもとしか映らないときには、子どもをじかに感じることはで

きないし、その子どもの必要としているものを与えることができないであろう。

外からの批判をうけまいと固くなつているときには、自分にとらわれて、違う角度から子どもをみるゆとりがない。保育者自身の悩みが多く、生きがいを見出せず、自己の望む道を見失つているときには、何をしても支離滅裂となり、生産的になることができないであろう。そのときには、外の世界に自分の心が響いていくことができる。

○ 保育の實際の場で重要なことは、保育者が子どもと心を通わせて、一つの生活をつくり上げていくことだ。そのために必要なのは、實際の場に当たつて、心を自由にはたらかせ、保育者自身が思いがけない世界をそこに見出していくことができることだ。子どもはことばや理くつにとらわれて

いない。ことばよりもききに心が動き、体が動いている。ほんとうに予想もしていなかった世界を見出すところに、想像性があり、創造性がある。保育者もそうだ。予想したことだけを見ようとしたら、それはひからびた人生になってしまう。思いがけない世界を見出せる世界、空間と時間があつてこそ、人間が育つのだ。

○ それにつけても、一クラス四十人の子どもは多すぎる。三十人をこえたらよい保育をするには、何かをぎせいにしなければならない。ならなくなる。

幼児教育を、ほんとうに振興しようと思ふならば、まず、一クラスの子どもの人数を減らすことをしなければならぬ。それをしてしないで幼児教育の振興はできない。